

コメント1 多極化の時代におけるBRICsの経済成長と地域秩序

武内 進一 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所

私自身はアフリカ研究者で、しかもアフリカと言ってもBRICsに数えられることもある南アフリカの専門というわけではなく、アフリカ中部のコンゴやルワンダなど、およそ経済的には圧倒的に貧困な地域を研究しております。ですので、コメントのご指名を受けたときに、まともなコメントができる自信がまったくなかったのですが、今日うかがって、予想以上におもしろかったというのが率直な感想です。

■一極体制からパワー・シフトの時代になるなかで成長国として脚光を浴びたBRICs

今日のシンポジウムのコンセプトは、BRICsを手がかりに今日の世界の位相を捉えることだと思いますので、その観点からなにが言えるかを考えてみました。まずBRICsという概念に立ち戻って考えてみると、そもそもこの概念は、2000年代初頭にゴールドマン・サックスの報告書で使われた概念ですから、もともとはゴールドマン・サックスの人たちの「新しい国々に対して投資をしましょうよ」という呼びかけであった、そのキャッチフレーズであったと考えていいと思います。

2000年代初頭がどのような時代かという点、アメリカの一極体制と理解されていた時代です。帝国という概念がしばしばもてはやされ、アントニオ・ネグリ、マイケル・ハートの本などが影響を与えていた時代でした。そこにBRICsという概念が出てきて、それと軌を一にするように資源高になり、そういった国々のプレゼンスがどんどん大きくなっていく。それに伴ってイラク戦争などがあり、一極体制が瓦解していき、むしろパワー・シフトの時代に入ってくるわけです。

国際政治学会では共通論題というものがあるのですが、先ほどここに来る前に調べてみると、国際政治学会では2003年に「なぜいま、『帝国』か?」を共通論題にしています。ですから、当時の共通論題はアメリカの一極体制をどう考えるかということだった。それが2011年、8年後には「21世紀国際政治——権力移行(パワートランジション)をどう捉えるか」という共通論題になっているわけです。ですから、アメリカの帝国体制というものから、パワー・シフトというように、

実態面でもアカデミックな関心でも、かなり急激に移行した時代だったと思います。

G20についても、初めて財務大臣・中央銀行総裁会議が始まったのが1999年で、2008年から首脳サミットが行なわれるようになってきている。ですから、たかだかこの10年ぐらいのあいだに、アメリカの一極体制から多極化、パワー・シフトの時代へと入ってきて、そのなかでBRICsというものが新しく成長してきた国だとして脚光を浴びるようになったということだと思うのです。

■成長のなかで産業構造がどう変化したのか 経済成長の中身を再評価する必要性

一方で、ゴールドマン・サックスの方がたがBRICsという概念をもちだしてきたときには、「そこにどんな投資をして儲けましょう」という話だったと思うのですが、それがこのところ、冒頭でも出ましたが、危ういという感じになってきた。その背景は、資源価格が低下して、そうした国々の経済にブレーキがかかった。一方で、経済成長しているけれども、すくなくともグローバルな競争力をもった産業が、資源産業以外に育っていないということがあるのだらうと思います。

これはもちろん国によって差異があると思いますが、私は自分がアフリカをやっているので——アフリカといっしょにすると言われるかもしれませんが、アフリカでもここ10年ぐらい急速な経済成長が起こっているわけです。そこには中国の参入というファクターがありますが、アフリカの経済成長は圧倒的に資源依存で、製造業の展開はほとんどないわけです。それとおそらくある程度は類似した側面もあるのだらうと思います。中国は「世界の工場」と言われるわけですが、そこでどの程度の産業の構造転換があったのかということ、あらためてよく知りたいなと思っています。

このように、BRICsという地域で経済がすくなくともマクロのレベルでは伸びていって注目を集めるようになった状況がありますが、一方で同じ時期に起こっていることは、高い技術力や収益性をもつような

企業や産業については、むしろ集中が起こっていると思うのです。たとえば軍事産業やコンピュータの中核部、それから自動車や製薬、化学といった産業は、アメリカをはじめとしたいくつかの先進国、とくに都市に集中している。これはサスキア・サッセンなどがグローバル・シティとして議論していることですが、国というよりは都市のレベルで集中が起こっていて、アメリカがそうであるように、急速に成長しているところでは急速に貧困層も拡大している状況があるわけです。

ですから、BRICsと呼ばれている国々の経済成長をどう評価するか、再考する必要があるのだろうと思います。先ほどロシアについて、資源集約的な経済構造は変わっていないというお話がありました。これが他の国でどこまで言えるのかは、関心があるところです。もし経済構造、産業構造が変わらないのだとしたら、規模自体は大きくなるにしても、資源価格に依存するような経済の不安定性とか、労働集約産業と比較しての相対的な低生産性は変わらないこととなります。産業構造がどの程度変わったのかということは、知りたいと思っています。

■ 国際秩序と地域秩序の軋轢が国内政治と関連し構造的な不安定性が存在している

一方で、BRICsを今日の意味で取り上げるときには、とくに宇山智彦さんのご報告で明示的に出ている政治的重要性を考える必要があると思います。とくにロシアと中国に関して言うと、明らかに軍事面での重要性は増してきて、地域秩序の中心を担う存在になっている。あるいは言い方を変えると、アメリカが依然として主導している国際秩序と地域秩序との関係という問題があって、地域秩序の文脈でアメリカ主導の国際秩序と衝突する可能性が出てきているということかと思っています。

これを15年ぐらい前のアメリカの一極集中の時代との比較で言うと、一極集中型の国際秩序のあり方が望ましくないという考え方も出てきたし、アメリカの側にそれを維持する能力も意思もなくなってきた。そこで、新興諸国が主導する地域秩序が、依然として米国主導の国際秩序のなかでどう位置づけられ、どう軋轢を起こす可能性があるのかということが問題になっている。すでに問題になってきているのはロシアと中国で、ロシアで言えばウクライナであり最近のシリアであるし、中国で言えば南沙諸島の問題であり、あるいは尖閣もそこに入るのかもしれない。

今日のお話をうかがってわかったことは、そういう軋轢が単に外交の問題ではなくて、国内政治との関連性があるということです。これも宇山さんから、人気とり、権威主義的ポピュリズムという話、ギャンブルであるという話がありました。中国の場合も、国内にあるナショナリズムと外交の問題とが結びついていることはわかります。だとすると、先ほどから申しあげている国際秩序と地域秩序の軋轢の問題は、BRICs諸国の国内政治と結びついているということで、そこには構造的な不安定性があるのだろうなと感じた次第です。

■ BRICs 諸国の経済成長は、国内社会階層や国際秩序との関係にどう影響したか

私の基本的な関心は、国内的には、この間の経済成長が国内の社会階層の構造にいったいどのような影響を与えたのか、どう変えたのか、あるいは変えていないのかということ。対外的には、国際秩序と地域秩序の問題にあります。そういう観点からあらためて4か国について、どういうことなのかを整理していただけたらありがたいと思っています。

具体的に言うと、インドであれば、いまのところインド中心の地域秩序がアメリカ主導の国際秩序と衝突するようには見えていないのですが、しかしやはりパキスタンの問題がありますし、核をめぐるようなことがあり得るのかについて、お考えをお聞かせいただければありがたいと思います。

ブラジルに関して言うと、総じてラテンアメリカの国々はアメリカに対して従属する傾向があると見えるのですが、そのなかで、ブラジルは地域秩序形成にどの程度の関心があるのでしょうか。舛方周一郎さんのお話のなかで、ルーラ政権期に社会格差が是正されたという話があったと思うのですが、それがどのようなメカニズムで——たとえば産業が成長したことによって社会秩序が是正されるような動きが起こったのかというのは、知りたいと思いました。

中国に関して言うと、渡邊真理子さんのお話からずいぶんいろいろなことを学んだのですが、やはり格差の問題をどう考えればいいのかということを知りたいと感じました。一方で貧困層の底上げがあったと思いますが、それがどの程度評価できることなのか。格差は広がっているのではないかというイメージがあるのですが、一方で貧困層がどの程度底上げされて、それが社会秩序の変化を考えるうえでどのぐらい評価できることなのかについて、教えていただければと

思いました。

宇山さんのお話は総じてすごくよくわかったのですが、資源依存の成長が、国内の社会階層構造に対してどのような影響があったのかを教えてくださいたいと思います。